

ミステリ読書案内

2022. 11. 4 発行元

第413号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

西村京太郎の代表作

西村京太郎についても『ベスト表』をはじめとしていろんな形で取り上げてきているが、今回はまともに「代表作」を選んで紹介することにする。当然のごとく初期の作品が中心になる。若い読者にも是非お勧めである。

初期の代表作を選ぶ

すでに何回か書いてきているように、西村京太郎は「トラベルミステリ」が全てではない。作家としてスタートした時は「本格ミステリ」としての要素がたっぷりの作品を書いていた。『D機関情報』のような異色作もあったが、多くはトリック重視の読者を楽しませるミステリを連発した。

初期代表作3冊ということで、謎解きのレベルの高さから『殺しの双曲線』をNo. 1に。『赤い帆船』『消えた乗組員』『発信人は死者』などもよく出来ている。No. 2

には『名探偵なんか怖くない』を選んだ。私のパロディ好きの観点から。No. 3は初期のトラベルミステリで、本当は『寝台特急殺人事件』なのだが、第265号で取り上げているので、今度は『終着駅殺人事件』にした。トラベルミステリとしては『夜行列車殺人事件』『ミステリー列車が消えた』『日本一周「旅号」殺人事件』なども傑作である。

短編集では『蜜月列車殺人事件』『雷鳥九号殺人事件』『都電荒川線殺人事件』などがレベルが高い。1970年代から1980年代にかけての西村作品はどれをとっても楽しさ満載である。

NO.3『終着駅殺人事件』

1980年カップノベルス書下ろし。トラベルミステリの第三弾になる。「終着駅」の読みは「ターミナル」。上野と青森という当時の終着駅を結ぶ連続殺人事件。列車は上野発の「ゆうづる7号」。青森の高校でかつて校内新聞を作っていた7人の仲間が集まり、故郷に向かう旅。出発前に上野駅のトイレで通産省の役人の安田章が殺されているのがわかる。残り6人は出発するが、列車の中から運送会社所長の川島史郎が消える。あとで鬼怒川で水死体となって発見される。そして、更にこの同級生の中から被害者が…。被害者達と同郷・青森出身の亀井刑事が十津川警部を助けて大活躍をする。「ふるさと」をテーマにした作品と言える。推理作家協会賞作品。

NO.1『殺しの双曲線』

1971年実業之日本社。初期の最も意欲に富んだ時期の代表作。題名そのものがヒントでもあるし、内表紙を開けるとその裏に「この推理小説のメイントリックは、双生児であることを利用したものです」と明示してある。冒頭から本格謎解きへの挑戦であることが示されている。そして「ノックスの十戒」についても触れ、読者との対等の立場であることも書かれている。

商店に押し入って顔も隠さずに強盗をはたらく男の姿が描かれ、続いて舞台は東北・宮城県の雪深い観雪荘に移る。6人の人物に招待状が届いて雪の山荘がスタートする。そこでもアガサ・クリスティの『そして誰もいなくなった』と同じセッティングであることがわかるようになっていく。インディアンの人形の代わりにボーリングのピン9本が用意してある。観雪荘の主人は若くて元気な早川。他に従業員はいない。最初の晩は睡眠薬騒ぎがあったくらいだったが、次の日には首吊り自殺に見せ掛けた犯行が…。現場の部屋には「かくて第一の復讐が行われた」のカードが止めてあった。間には東京での連続強盗事件の様子が挿まれている、警察が振り回されている現状も示される。これらが最後にどのように結びついていくのかが見どころ。

No.2『名探偵なんか怖くない』

1971年講談社。「乱歩賞作家書下ろしシリーズ」の中の一冊。本書は『名探偵シリーズ』の一作目で、この後『名探偵が多すぎる』『名探偵も楽じゃない』『名探偵の乾杯』と続く。メグレ、ポワロ、クイーン、明智の名探偵が勢揃いして取り組む事件。

私の年代から見ると1968年に起きた「三億円事件」は忘れられない出来事。東京の調布市で、銀行から会社へお金を運ぶ現金輸送車が白バイ警察官風の人物に止められて三億円を奪われたというもの。その手際によさと言うか、警察が捜査してもほとんどが霧の中のままで、当時大きな話題になった。今の若い人たちには馴染みはないだろうけれども、この「三億円事件」を再現して名探偵に解かせようと考えたのは成金で財産を持て余していた佐藤大造。本書の冒頭では大造の秘書になった三島が空港にエラリー・クイーンを迎えに出る場面から始まる。そして、メグレにしても、ポワロにしてもお得意の台詞を口に出しながら、この催しに参加し、捜査に取り組むところがいかにもパロディらしい雰囲気。でも、単に面白おかしいで終わらせずに、本格ミステリとしての仕掛けが作りられている。「読者への挑戦」までついているサービス精神も素晴らしい。